

# 女子大学生の肥瘦意識に関する研究

青山昌二\*

## A Study on the Self-Image of Ponderosity of Female Students

by

SHOJI AOYAMA\*

### Abstract

The purpose of this study which was based upon the 1050 female students was to clarify the relationships between their self-image of ponderosity and their actual measurements of height and weight and between their self-image of ponderosity and their physical fitness score. The results were as follows:

1. About 40 per cents of them evaluated their stature as fat or fatter and about 25 per cents of them as slim or slimmer.
2. The regression line obtained from the students' self-image of weight over height showed about three kilograms less than that obtained from their actual measurements.
3. The regression coefficient of weight over their height was about 0.6~0.7. The regression formula of the self-imagined standard stature was  $\hat{Y}=0.65X-53.2$ .
4. Between self-imagined ponderosity and physical fitness test score there was a tendency that the slim females get better score rather than the fat ones.

### I 研究目的及び方法

最近若者の体格についての関心が社会的に特に高まってきている。たとえば、東京都教育委員会が実施している児童生徒の体力テストの結果についてみると、昭和48年4月10日付の毎日新聞には「カッコいいが力なし。都会っ子高校生の発育頭打ち」という見出しで、体格面では胸囲が全国値を下回っていること、その他前回テストに比して横ばいであることを報じているし、昭和50年3月27日付の朝日新聞には「“もやし型”返上、都会っ子。運動能力伸びました。定説やっと逆転の兆し」とあるし、また同じ朝日新聞の昭和51年1月

14日付には「東京っ子。体格は後退気味。身長や胸囲・高校生に目立つ」という見出しで、体格が前回テストの結果に比して劣るか横ばいで、特に女子の胸囲が6歳から17歳まで全年齢で前年に比して劣っていることなどがでている。これをみると、東京の子どもたちの定着した表現となっている「もやし型」が年々どうなっているか——ますますそうになっているのか、逆にそれを返上しつつあるのかあるいは同じような状態であるのか——ということに対する関心が非常に高いことがうかがわれる。しかしこのことはひとり都会のみならず、近年の急速な全国の都市化の波のなかで、大きな社会的関心をよんでいる。

\* 東京大学教養学部体育研究室 (Department of Physical Education, College of General Education, University of Tokyo)

こうして、「最近の若者はむやみに細くなりたがってばかりいてだめだ」ということをよく耳にするわけである。ここには、最近の若者は「むやみに細くなりたがって」いるということがいわれているし、またその細くなるのが「だめ」であるという体格に対する評価もなされているわけである。この「だめ」であるという根拠にはいま上でみた「カッコいいが力なし」にあるような、体力との関係でいわれていることが多い。

それでは最近の若者はどのように「細くなりたがってばかり」いるのか。その前にいったいかれらは自分の体格の肥瘦の程度についてどのような評価をくだしているのであろうか。そしてこの肥瘦の主観的評価において同じ程度のものどうしをそれぞれ集めて、そこにかれらの実際の身長及び体重の値を置いてみれば、それはかれらの評価による上での「同じ体つき」といったものが把握されるが、それは身長・体重を軸とすればどのような座標上にあるのであろうか。さらにはかれらが細くなりたいと望んでいるその「細さ」では体力テストの成績からいってやはり「だめ」なのであろうか。本研究は、こうしたことを問題として分析を行なおうとするものである<sup>1)</sup>。

そのため、今回は女子大学生を対象として、昭和51年7月に実施した質問紙法による意識調査の結果とかれらの実際の体格との関連、および体力テストの成績との関連を分析する<sup>2)</sup>。

標本は、東京大学教養学部1・2年生347(全数調査である)・千葉大学105・青山学院大学261・独協大学190・日本女子大学147、の5大学合計1051人である。体力テストの成績との関連は東京大学347人を対象としたものである。

## II 研究結果及び考案

### 1. 肥瘦の自己評価

女子大学生は自分の体の肥瘦についてどのように評価しているのであろうか。この点についてまず質問紙法によって行なった調査結果を述べてみる。質問の形式は、自分の体について「肥っている」かどうかを、⑤非常にあてはまる・④だいたいあてはまる・③どちらともいえない・②あまりあてはまらない・①全くあてはまらない、の積極

的肯定から積極的否定まで5段階の選択を設けて、全員にそのいずれかに反応させたものである。したがって、全員を5段階の選択肢のいずれかに反応させるという方法であることから、⑤及び④を「肥」の側に自己評価しているものとみなし、③を肥瘦の程度のどちらにも片寄らない「普通」と自己評価しているものとみなし、②及び①を「瘦」の側に自己評価しているものとみなして、論をすすめていく。

その結果は図1に示すとおりである。これをみ

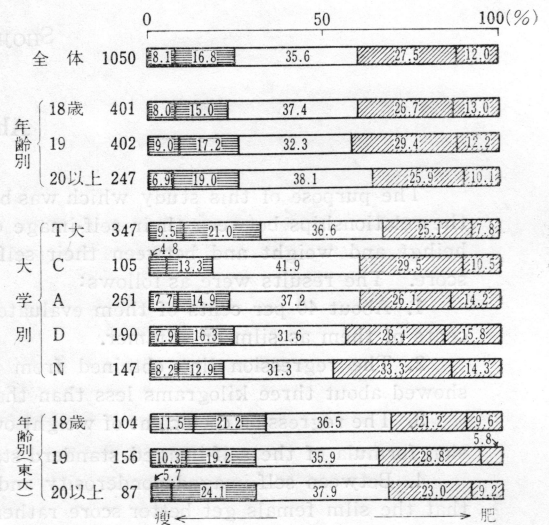


図1 肥瘦の自己評価 (%)

ると、標本全体(1050)では①から⑤まで8.1・16.8・35.6・27.5・12.0%であるが、瘦の側・普通・肥の側の3段階にしてみるとおよそ25・35・40%というところである。これは、同じ質問形式による昭和47年実施の東大男子学生調査の結果すなわち「およそ6割のものは自分の体つきを細め・痩せている方に考えており、2割のものは肥っている方に考えており、残りの2割のものは肥っても痩せてもいない・平均的な体つきであると考えている」<sup>3)</sup>という結果とは大きな相違をみせ、女子では25%のものは自分の体つきを瘦の側に評価し、40%のものは肥の側に評価し35%のものは普通であると評価しているわけである<sup>4)</sup>。

いまみた女子の標本全体についての自己評価の傾向を年齢別に18歳・19歳・20歳以上(以下にお